

ing to leave its development to the slow, sometimes chaotic process of market forces (as is done in Western Europe) but wants to get directly involved in supervising and nurturing it. The relatively smooth development of modern credit institutions in Thailand (such as banks, finance companies, the stock market) can be attributed partly to the effective guidance of the Bank of Thailand (which is now sponsoring the creation of the Securities and Exchange Commission to replace the present regulating arrangements for the Stock Exchange of Thailand). Among government agencies, the Bank of Thailand holds a unique place: well before the 1980s, it had been corruption-free and efficient, unlike other government agencies.

Thailand cannot be characterized as a strong state, like such NICs as Singapore and South Korea, as the author correctly points out (p. 170). If Thai development is considered to have been relatively successful, what should be the relation between the government and the business sector in other developing countries? The author argues that until it can strengthen its state structure, its development “will be better served by a society-oriented approach which encourages an active participation of societal actors in economic policy-making” (p. 170). The trouble with this argument is that, for a developing country, Thailand has a fairly strong government. This may not be so compared with Korea or Singapore, either today or when their per capita incomes were similar to that of Thailand today, but compared with other ASEAN countries, Thailand’s bureaucracy is impressively strong. This is related to the fact that the country has been largely an authoritarian state (first under absolute monarchy and then under the military). Into such a strong state structure, businesses have been incorporated at a pace virtually dictated by the bureaucratic elites. When the state structure is weak, as in the case of the Philippines, business interests capture the government, and changes in government policy (such as a shift to export-oriented policy) become difficult since they threaten those with vested interests in current policy. The ability of the

Thai government to shift to export-oriented strategy is not unrelated to its ability to provide infrastructure and general administrative services (which economists call public goods). The author does not ignore the problem of government, but because of his focus on business associations, the government’s relative strength and autonomy do not emerge clearly in this book.

(Kunio Yoshihara <吉原久仁夫>・CSEAS)

Richard Chauvel. *Nationalists, Soldiers and Separatists: The Ambonese Islands from Colonialism to Revolt 1880–1950*. Leiden: KITLV Press, 1990, xv+432 p.

インドネシア独立革命は国内各地に様々な反応、変動を引き起こしたが、その多様なスペクトラムの中でも、アンボンの南マルク共和国 (Republik Maluku Selatan, 以下 RMS) 運動は、その反革命的な性格により際だっているとされてきた。各地の反応をコンパクトにまとめたオードリー・ケイヒン編『インドネシア革命の地域的ダイナミクス』の中で RMS についての章を担当したショーベルがこのほど [Chauvel 1985],¹⁾ 二十章にも及ぶモノグラフをオランダの王立地理言語民族学研究所から出版した。シドニー大学へ提出した博士論文をもとにしたものであるが、RMS 運動へと至る、アンボン人なるエスニック・アイデンティティの形成過程について、かなり精細な史的記述を試みている。依拠する資料も、オランダ、インドネシア側の文献だけでなく、生存している関係者へのインタビューも行われており、その記述は詳細かつバランスのとれたものになっている。

RMS が如何なる経緯で生まれたかについては、いままで「オランダ植民地支配の中で特権的利益を享受していたアンボン人 (特にクリスチアンの植民地軍兵士) が、インドネシア共和国に併合されることで権益を喪失する状況に直面し、あえて

1) 公刊された論文としては他に、[Chauvel 1980] 等がある。

併合に対して抵抗した運動」といったステレオタイプ化された通説がしばしば繰り返されてきた。²⁾しかし RMS 運動の形成過程の詳細となると、今まで余り明らかにされてこなかった。ショーベルの著作は、定説を覆すものではないが、一地方における複雑な政治過程を描くことで、ステレオタイプ化された RMS 像に深い陰影をつけることに成功している。

全章を通しての内容の要約は次の通り——アンボン人というアイデンティティの形成の観点から言えば、主として三つの軸が重要になる。三つの軸とは、キリスト教徒とイスラム教徒、そしてエミグレ (émigré, あえて訳すると島外帰国子女。ジャワ島などで生まれ育ち、のちにアンボンへ戻って来たアンボン人をさす) 対島内居住者、さらに伝統的支配層 (特にラジャ周辺) と新たな知識人層の対立である。こうした軸の交差する中で、アンボンにおけるエスニック・アイデンティティの形成は行われたが、その形成の流れは主として二つに分かれた。

一つは、オランダ植民地支配の中で、その特権的地位を維持し、その体制の枠内で自らの権限を拡大していくことを目指したグループである。それは、モルッカ政治同盟 (Molukse Politiek Verbond) からマルク国民協会 (Perkoempelan Kebangsaan Maloekoe), 大東協会 (Persatoean Timor Besar) に至る、オランダ忠誠派 (loyalists) の集団で、やがてアンボン・ナショナリズム、特に RMS 運動を結果的に担っていくことになる。このグループを構成していたのは、兵士、エミグレそして伝統的支配層であると、ショーベルは指摘する。

もう一つの流れは、オランダ植民地支配に終止符を打つべく、他のエスニック・グループと共に

2) 例えば、マクフェイは、「多数派民族を統治する目的で、植民地権力により兵力として利用されたエスニック・マイノリティーが、その後の新生独立国家に対し挑戦した代表的例」として、ミャンマーのカレン人とインドネシアのアンボン人のケースを挙げているが [McVey 1984: 17], これなど RMS に対する見方の代表的な例であろう。

共和国を樹立しようとしたインドネシア独立派である。この流れを担ったのは、都市に住むオランダの教育を受けた都市知識人層 (移住者及び島民) と田舎に住む反ラジャのグループであるが、組織的にはサレカット・アンボン (Sarekat Ambon) を源流とし、やがてインドネシア独立党 (Partai Indonesia Merdeka) に合流する流れである。この流れをつくった知識人は、オランダ植民地支配の権力秩序の中での相応の社会的地位をもたず、その外側で独立系の学校の教師やジャーナリスト、自営業者などで生計をたてていた点で、またジャワでのナショナリズム運動に積極的に関与していた点で、スモキルら忠誠派の知識人と性格を異にする。この二つの流れがもつれあいながらも、やがて結果的に RMS 独立宣言へと至る経緯について、アンボン社会の長期的変化の文脈との関係をまじえて説明される。

香料の独占的貿易による黄金時代が終わることで、アンボン社会は植民地軍 (KNIL) の兵士の俸給に大きく依存せざるをえなくなる。またオランダ側も治安維持の観点からアンボン人を重用したことはよく知られるが、アンボン人の特権的地位と経済的従属性とはこのように表裏一体の関係にあった。この特殊な状況は、例えば1921年、全インドネシア人兵士を平等に扱う旨の改革をオランダが導入しようとした際、アンボン人側は、それを屈辱ととらえ反対運動を行ったという現象に現れた。また、この兵士達は島の社会から切り離された兵舎 (tangsi) 社会という半ば隔離所の中に生活していたため、それが現地の状況の変化に疎くなってきたことが、インドネシア・ナショナリズムの進行とのズレをよりいっそう大きくすることになる。

アンボン人というエスニック・アイデンティティの形成に重要な役割を果たしたのが、やはり植民地軍である。植民地軍でのアンボン人の定義は「モルッカ諸島出身のキリスト教徒原住民」であり、一方、イスラム教徒の「アンボン人」はマレー人というカテゴリーにはめられていた。1925年にはオランダは軍におけるインドネシア人の中での給与面の格差を解消するが、形ばかりの差は残る。それは例えば朝食にアンボン人はパンをもらい他

のインドネシア人は飯をもらうといった食事の内容など待遇面での些細な差であるが、アンボン人兵士にとっては、こうしたことが象徴的な重要性をもった。彼らの特殊な位置をさらに際立たせたのは、日本軍による占領である。アンボン人兵士は日本兵士によって危険視され、皮肉なことにオランダ兵士と平等に扱われ一緒に収容所に入れられた。

また日本軍はムスリム社会の支持を取り付けるよう努める一方、キリスト教徒に関してはオランダとの協力関係があったとして疎外する。これはアンボン社会内のイスラム教徒とキリスト教徒の関係を決定的に悪化させた。

日本軍の占領は、また伝統的支配層と知識人層との関係も変えた点でもアンボンにおける権力構造を大きく変容させた。サレカット・アンボンの創設者であるパティが島外に追放されて以来、インドネシア独立派の思潮、運動は停滞の傾向にあったが、サレカット・アンボンの後継指導者であったパペラらが日本軍によって、伝統的支配層の上に立つ上級官吏として登用されたことにより、状況は一変してしまった。島外との交流増大により生じた社会的変化の結果、伝統的支配層の権力の低下はすでに19世紀終わり頃から、始まっており、日本軍による占領はそれを加速化させ、決定的なものにした。そして、この権力の逆転現象は、終戦によりオランダ、オーストラリアの連合国軍がアンボンに上陸した後も、続き、二度行われた南マルク議会選挙では、パペラの率いるインドネシア独立党が圧勝する。

このように兵士、伝統的支配層は、既得権を失っていく一方、やがてインドネシア共和国軍が上陸して来るという状況に追い込まれた。もともと彼らは、連邦制か否かの選択肢が示された時、迷わず前者の道を選んでしたが、頼みの綱であるオランダから一方的に見放されたことで、その望みも絶たれた。また、ジャワ島で間近に独立革命を見て戻ってきた兵士らは、ジャワの新生国家を共和国主義・革命主義・イスラム教主導・ジャワ中心主義の脅威と重ね合わせて見るようになっていた。このように袋小路に追いつめられた彼らを引率しながら成り行き任せで RMS 運動への道に導

く役割を果たしたのがスモキルやマヌサマといったエミグレ知識人であった。

一方のインドネシア独立派も、アンボンの特殊な政治的状況に規定された限界を抱えていた。サレカット・アンボン人はインドネシア・ナショナリズム運動の道を進むと同時に、忠誠派ないし反革命主義的スタンスに立っていると装わなければならないというジレンマを当初から抱え、結局それを自らの力で解決することができなかった。インドネシア独立派の限界性は、RMS へと向かう動きを彼らが制止できなかったことに端的に現れている。インドネシア・ナショナリズムの生成で常に指摘される「教育と反植民地との相関関係」は、アンボンの場合に関しては、明確な形では現れなかった。

結局、運動としてのアンボン・ナショナリズムは、本質的には独立や自治への願望に根ざしたのではなく、むしろオランダへの依存心から生じたものであり、RMS 運動はただ恐怖に突き動かされたもので、展望や計画を欠いたまま悲劇を生み出してしまった。

以上が、ショーベルのモノグラフの概要であるが、アンボン人というエスニック・アイデンティティの形成過程における揺らぎ、多様化、そしてその中でのズレやネジレといった現象について、よく描かれている。エスニシティの問題を分析する際の枠組みについて全く触れられていないものの、その部厚い記述の中にはエスニック・アイデンティティ形成の過程についての興味深い問題が散見される。

例えばエスニック・グループの縦の重層性（例えばラジャ対都市知識人）、複相性（例えばムスリム対クリスチャン、またその中での伝統派對改革派の対立）、さらにネジレ現象（ムスリム社会のラジャと RMS との協力関係）といった、エスニシティ分析の際の静態的な特徴について、事例をもって示してくれている。また、集団的アイデンティティの境界の可変性及び任意性、さらに権力関係がエスニック・アイデンティティの形成に及ぼす影響といった動態的なメカニズムについての理解も、テキストの再構成的な読み方により、かなり鮮明になってくる。

例えば、エスニック・アイデンティティの強度を決める要素を、 α 、中央権力との関係(疎外度)、 β 、共有化される利害、 γ 、象徴的な差異、の三つに分節化して考え(図1)、³⁾ 権力関係がエスニック・アイデンティティの形成に及ぼす影響について、ショーベルの記述を批判的に組替えながら、説明すると以下ようになる。アンボン人という集団的アイデンティティは当初、植民地権力との関係、また他のエスニック・グループとの陰微な権力関係から生み出された。日本軍占領などによる急激な社会構造の変動、そしてオランダから共和国へと権力が委譲される過程で、アンボンと中央権力との関係は悪化していき(α 軸に沿ったシフト)、また同時にラジャ、兵士、エミグレ知識人の三者による利害の共有化が進んでいく(β 軸に沿ったシフト)。その結果、集団的アイデンティティは強められ、アンボン・ナショナリズムが誕生するに至る(弱から強への斜め上へのシフト)。

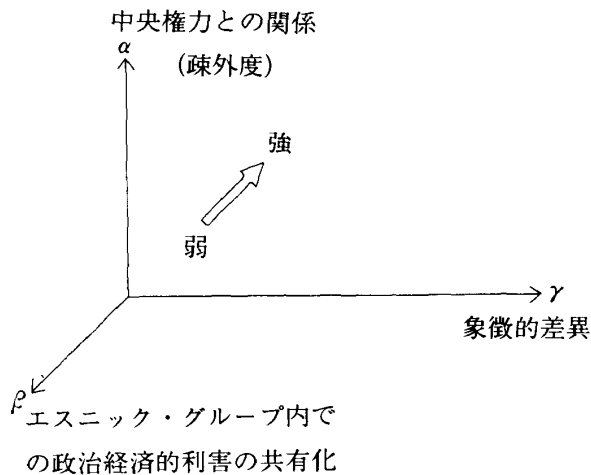


図1 エスニック・アイデンティティの強度を規定する要素

以上のように、全体としてショーベルの記述の背後には、政治経済的要因(α 、 β 軸)が集団的アイデンティティの形成を規定するという領域仮説が垣間見られる。エスニシティの定義で、いつも

問題になる主観的条件説、客観的条件説との関係で言えば、客観的条件についての記述に重点がおかれる余り、主観的な側面についての(例えば γ 軸)変化についてのヴィヴィッドな記述に欠けてしまっている。RMSの指導者へのインタビューなどをもとに精細な記述をしながらも、その中からは彼らの人間像が余り視えてこず、筆致もいささか乾いたものになっているのは、そうしたためかもしれない。

RMS運動周辺に集まった人々が「想像される共同体」をどのように形成していったか等、現象学でいう生活世界ないし意味世界を捉える視点があって初めて、その集団的意識が、その後、インドネシア共和国という政治権力空間の中で、または遙かなるオランダという異郷で、如何なる変容を遂げていったのか、といったことについても理解が可能になろう。集団的記憶を完全な白紙に戻すことができない以上、今日の問題を考える上でも、そうした視角は必要であろう。

参 考 文 献

Chauvel, R. 1980. Ambon's Other Half—. *Review of Indonesian and Malaysian Affairs* 14(1): 53-67.

———. 1985. Ambon: Not a Revolution but a Counter-revolution. In *Regional Dynamics of the Indonesian Revolution: Unity From Diversity*, edited by Audrey R. Kahin, pp. 237-264.

McVey, Ruth. 1984. Separatism and the Paradoxes of the Nation-State in Perspective. In *Armed Separatism in Southeast Asia*, edited by Lim Joo-Jock and S. Vani. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Yinger, J. Milton. 1986. Intersecting Strands in the Theorisation of Race and Ethnic Relations. In *Theories of Race and Ethnic Relations*, edited by John Rex and David Mason. Cambridge: Cambridge University Press.

(土佐弘之・摂南大学)

3) この分析枠組みは、インガー [Yinger 1986: 29] のものを修正したもの。